

史料紹介

阿部正功著「棚倉紀行」

はじめに

草創期の人類学や考古学の研究に大きく寄与したが、その足跡がほとんど知られていなかった、阿部正功（一八六〇～一九二五）の生涯と学問について、『当館研究紀要一七号』で紹介した^①。その後、正功の学問活動に關して、論文や他機関の展示においてとりあげられる機会も見られるようになった^②。

正功^③は、異色の経歴を持っており、万延元年（一八六〇）に老中など幕府の要職を務めた譜代大名の名門である阿部家の一五代当主正耆の二男として生まれ、七歳の時に陸奥国棚倉藩（福島県東白川郡）の最後の当主となり、明治維新を経て、明治一七年（一八八四）に子爵となった人物である。一方、幼い頃より学問好きで、遺物・遺跡に深い関心を持ち、明治二三年（一八九〇）に人類学会に入会し、自ら熱心に調査発掘を行い、多くの調査記録を遺した。また、同三年（一八九八）の芝丸山古墳（現港区）の発掘に関わるなど本格的な発掘にも参加した。坪井正五郎や鳥居龍蔵ら当時の学会を彩る人々と親しく交わり、自邸に陳列館を作り収集した遺物を公開するなど、考古学の発展に重要な足跡を残した。

平成二四年秋に福島県文化財センター白河館にて開催された「ふくしま考古学研究の春暁^④」という展示において、旧領地であった棚倉の遺跡と阿部正功の事跡がとりあげられ、当館からも「棚倉紀行^⑤」という史料を貸出

した。これは、正功が明治一三年（一八八〇）に棚倉を訪れた際の行程や、旧藩領の元藩士たちとの交流などを記した詳細な旅行記である。本稿では、この「棚倉紀行」を翻刻して、内容を簡単に紹介する。この記録を通して、人類学会に入会する以前の学問的方向がまだ定まっていなかった若き頃の正功が、当時どのようなことに関心を持っていたのかについて、知る手がかりとなればと考えている。

一、阿部正功の研究動向の変遷

「棚倉紀行」を見ていく前に、正功の学問活動の変遷について、前稿などにより簡単にまとめてみておこう^⑥。

慶応二年（一八六六）七歳（数え）より、手習い（習字）、四書素読をはじめた。

棚倉藩知事となって明治三年（一八七〇）五月に棚倉へ帰国後は、藩校修道館に通学。

明治四年（一八七二）一〇月、一三歳から洋学を始める。

青松寺内（現東京都港区）の日新義塾（不明）へ入社（一五年）。

六月から勸学義塾に入塾し、正則を学ぶ（同六年退社）。

明治六年（一八七三）四月に一四歳で、慶応義塾へ入塾（一〇年）。

同一〇年十一月、箕作秋坪が開いた三叉学舎に入塾（同一四年九月）、漢学を安並碓氷（高知の人）に学ぶ。

丸山 美季

明治一四年一二月より、漢学修養のため東京府士族金枝義惠の塾に入塾（一六年一月）。

このように、正功は、幼い頃より漢学を学ぶ一方、英語塾の双壁と言われた福沢諭吉の開いた慶応義塾と、箕作秋坪の三叉学舎の両方で学んだ。いわば、当時最新の教育を受けた知識人だったといえる。

「柵倉紀行」が書かれた明治一三〜一四年頃は、正功は学問三昧の日々を送っていた。その頃の正功の日記には、ほとんど毎日朝早くから三叉学舎や安並の所へ通い、そのかたわら、上野の教育博物館（後の国立科学博物館）や帝室博物館（現東京国立博物館）、勸業博覧会などに訪れている記事が度々見える。すなわち、古物、博物学的な方面に興味を持っていたことは明らかであり、既にのちの人類学や考古学に傾倒していく片鱗がここに窺える。

明治一五年（一八八二）には地学協会に入会し、協会員であった外務省書記官北澤正誠の所へ通学し、一時は寓居させてもらっていたらしい。このように学問に邁進していた同二〇年（一八八七）六月二十八日、正功は、地学協会の例会において講演者であった坪井正五郎と初めて出合い、以後人類学・考古学へ急速に熱中していく。明治二四年〜二七年（一八九一〜九三）頃は最も精力的に遺物・遺跡調査を行い、人類学会で活躍した時期である。

その後明治二九年（一八九六）一月、考古と歴史を愛する趣味人の集りとして入会制限もない自由な会として発足した「集古会」や、人類学会から分離した「考古学会」にも入会するなど、活動の場を広げている。そして正功の発掘活動のクライマックスといえるのが、同三二年（一八九八）の芝丸山古墳（現東京都港区）発掘調査への参加である。当初は一見学者として見物していた正功であったが、坪井正五郎にその発掘を任された野中完一を手伝うようになり、毎日のように現場に通い、共に作業を行い、その際の作業を詳細に記録した「芝丸山古墳調査略記」を残している。

以上のように、明治三〇年代前半までは、人類学会の例会に出たり、土俗調査に出かけたり、鳥居龍蔵や坪井正五郎などをはじめとする人類学会、

考古学会員と交際するなど、以前程ではないが活発な活動が見られたが、三〇年代後半になると次第に学会活動・発掘調査活動から遠ざかっていく。さらに大正二年（一九一四）、坪井正五郎が亡くなると、学会活動にはほとんど姿を見せなくなり、同一四年（一九二五）六五歳で死去した。

二、「柵倉紀行」翻刻

凡例

- 一、学習院大学史料館受託睦奥国柵倉藩主阿部家史料中、阿部正功著「柵倉紀行」全一冊の全文翻刻である。
- 一、翻刻にあたって、適宜、句点・並列点を付した。
- 一、著者による訂正が数か所見られるが、訂正後の語句のみを翻刻した。
- 一、宛字・誤字は、正しい文字がわかる場合は右傍に（―か）と記した。
- 一、用字は原則として、常用漢字に直し、変体仮名も現在の字体に改めた。
- 一、躍り字は原本通りとし、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」に改めた。
- 一、フは事、トはトモに直した。
- 一、欄外の書込みは該当箇所に「」に入れて示した。
- 一、原文にある二行割書は、（〜）を付して示した。改行は／で示した。
- 一、史料翻刻にあたって多大な便宜をはかっていただいた阿部正靖氏に厚く御礼申し上げます。

〔本文〕

（表紙）

「柵倉紀行」

柵倉紀行

ふみ月の記

明治十三年七月五日、雨微風、前六時、霞町ヲ発車ス、九時武州足立郡保木間村農家ニ休ム、同十五分発ス、十二時廿分埼玉郡越ヶ谷駅字尾曾根茶屋桶八方ニテ昼食ヲ喫ス、足立郡千住駅ト埼玉郡越ヶ谷駅ノ間ハ青田ニシテ稲苗高サ尺余ニ及フ、同三十分発ス、後三時同郡粕壁駅立場ニ休ム、同十五分発ス、越ヶ谷駅ヨリ粕壁駅ヲ経テ葛飾郡杉戸駅迄テ大小豆畑多シ、高サ二百余ニ及ヘリ、六時過キ同郡幸手駅ニ着、篠内某方ニ泊ス、本日悪路故ヘ車夫等甚タ難渋ス、里程十里廿八町廿二間

六日、曇微風前五時二十分、葛飾郡幸手駅篠内某方ヲ発車ス、七時過キ同郡栗橋駅渡船場ニ着ス、幸手駅ヨリ当駅迄テ堤路ノ左右綿、大小豆ノ畑多シ、又駅ノ裏堤ニ「カラムシ」草茂生ス、同四十分、利根川ヲ渡船ス、数日前ヨリ雨天故ヘ満水ス、此川ハ中央ヲ以テ武蔵・下総兩國ノ界トス、下総国葛飾郡中田駅ヲ経、九時過キ、同郡古河駅立場ニ休ム、中田駅ヨリ当駅迄テ街道ノ右ニ豆畑在リ、左ニ桃林在リ、而シテ地質ハ赤土ト浅黒土ノ雑トス、同二十分発ス、当駅ヨリ野州郡賀野木駅迄テ小豆畑多シ、夫レヨリ同郡間々田駅迄テ猶、クノ木、の林在リ、街道ノ右側ニ天蠶ヲ養育スル榎林ヲ所有スル一農家ヲ見受タリ、又タ林間ニ陸穂、綿、小豆畑アリ、後一時過キ同郡小山駅茶屋ニテ昼食ヲ喫ス、間々田駅ヨリ当駅迄テ綿、小豆ノ畑多シ、同三十分発ス、同郡羽川・小金井両駅ヲ経、五時前同郡下石橋村立場ニ休ム、小山駅ヨリ当駅迄テ榎林多シト雖トモ折々原野在リ、七時過キ河内郡雀宮駅着、戸室屋ニ泊ス、石橋駅ヨリ当駅迄テ梨、蕎麦、干瓢、等ノ畑多シ、干瓢ハ野州物産ノ一ツナリ、都賀郡野木駅ヨリ当駅迄テ地質ハ浅黒色ノ土ナリ、里程十一里、廿八町七間

七日、曇、前五時過キ河内郡雀宮駅戸室屋ヲ発車ス、七時前、同郡宇都宮駅ニ着、森氏ヲシテ直チニ電信局ニ行シテ棚倉ヘ出張ノ由ヲ電信ニテ、吉田氏迄テ報セ使ム、当駅ヲ距ル廿町余ノ所ヨリ坂路ト相成ル、八時半過キ、街道新田村農家ニ休ム、宇都宮駅ヲ距ル一里半余、九時三十分、同郡白澤駅ヲ経テ鬼怒川ヲ渡船ス、塩谷郡上阿久津・氏家ノ両駅ヲ過キ弥五郎坂ヲ越ヘ、十二時二十分同郡喜連川駅ニ着、大黒屋ニテ昼食ヲ喫ス、宇都

宮以北白澤・上阿久津・氏家ノ三駅ヲ経、当駅迄テ地質ハ浅黒色ノ砂土ナリ、中ニモ弥五郎坂ハ火山質ニシテ第一浅黒色砂土、第二深赤色焼土、第三黄色土、第四鼠色粘土等ノ数層ヲ現セリ、同五十分発ス、後四時過キ那須郡佐久山駅立場ニ休ム、喜連川駅ヨリ当駅迄テ街道ノ左右ハ那須野続キノ原野ニテ稀ニ雑木ノ林在ルヲ見受タリ、同郡大田原駅ヲ経、七時過キ市野沢村立場ニ休ム、同三十分発ス、鍋掛駅ヲ経、那珂川ヲ渡リ、九時過キ、同郡越堀駅ニ着、藤田某方ニ泊ス、市野澤村ヨリ一里余ニシテ夜ニ入り、微雨降り、大ニ歩行ニ難渋セリ、佐久山駅ヨリ大田原・鍋掛を經テ、当駅迄テ地質ハ浅赤土ニシテ街道ノ西方ハ数里ノ間、漠々タル那須野ノ曠原ニテ全国中第一ノ平原ト云テ可ナリ、里程十四里廿四丁十間余

八日、晴微風、前六時過キ、那須郡越堀駅藤田某方ヲ発車ス、坂路を越ヘ同郡芦野駅ヲ経テ十時前同郡奇居村茶屋ニ休ム、同三十分発ス、十一時過キ磐城国西白河郡境明神茶屋ニ休ム、当所ハ奇居村ヨリ坂路ヲ登リ詰メタル所ニテ下野・磐城兩國ノ界ナリ、越堀駅ヨリ芦野駅奇居村ヲ経テ国界迄テ地質ハ浅赤土・浅黒砂土及ヒ浅黄土ノ混合物ナリ、暫時ニシテ発ス、十二時前、同郡白坂駅ニ至ル、棚倉ヨリ出迎トシテ数日前ヨリ出張シタル吉田、牧村、櫻井、三氏ニ面会ス、暫時ニシテ発ス、駅口ヲ距ル五、六丁目ヨリ白河住居旧藩士ノ出迎タル者三、四名及至八、九名、又ハ十余名ニ出逢ヘリ、十二時半過キ同郡小丸山村ニ休ム、白河ヨリ出迎タル旧藩士二十余名ニ面会ス、暫時ニシテ発ス、白河駅入口九番町ニテ出迎タル五、六名ニ逢フ、一時過キ西白河郡白河本町内池屋ニ着ス、昼食ヲ喫ス、後チ当初住居旧藩士六十余名ニ面会ス、終テ酒宴ヲ開ク、棚倉ヨリ出迎タル十余名ニ別席ニシテ酒宴ヲ開カシメタリ、五時前一同退散ス、同三十分ヨリ森本氏ノ請ニ依リ大工町森本氏設立の撃劍場ニ行キ劍・棒両術ノ試合ヲ一覽ス、七時過キ旅寓ニ帰ル、同十五分過キヨリ白河住居平民十余名及ヒ久田野村旧庄屋等ニ面会ス、八時半頃森本氏来ル、面会ノ上、旧高知藩要馬術大意ヲ談話ス、同四十分頃中村氏妻ニモ面会ス、兩人共九時半過キ退散ス、境明神ヨリ坂路ニテ街道ノ左右ハ半ハ原野ナレトモ殆ント半ハ田畑ナリ、地質ハ「サンドストーン」層ナルベシ、麦畑ハ黄色ヲ現セルトモ未タ刈始メサ

ル模様ナリ、稲作ハ植付後ニ番草ヲ取タル位ニテ、縄カ八、九寸ニ及ヘリ、
里程七里五町十五間

九日、前七時、旅寓ヲ出テ、常宣寺ニ行キ墳墓ヲ拝ス、八時前旅寓ニ返ル、
同三十分、恒屋、森、牧村、吉田、其他棚倉ヨリ出迎タル、櫻井、荒川、大輪、
牛久保、近藤、大沼、本多、等ヲ従ヘ、本町内池屋ヲ発車ス、櫻町ニテ白
河住居旧藩士ニ別ル、駅口ヲ出テヨリ道々諸氏ニ戊辰戦争ノ形況ヲ尋問ス、
十時過キ、同郡新地山ノ麓ナル農家ニ休ム、室氏妻ニ面会ス、後チ旧藩
士兩三名ト共ニ新地山ニ登ル、三丁余ニシテ頂上ニ達ス、時ニ微雨降り白
河近傍ヲ遠望スルヲ得ス、直チニ農家ニ歸リタリ、同三十分発ス、十一時
三十分同郡釜子村ニ着、農家ニテ諸氏ト共ニ昼食ヲ喫ス、後チ横川胃蔵男
某ニ面会ス、白河駅ヨリ蕪内村迄テハ青田ニシテ稲作絶カニ七、八寸ニ及ヘ
リ、夫レヨリ釜子村迄テ田畑アリト雖トモ三分二ハ原ニテ雑木茂生ス、後
一時諸氏ヲ従ヘ発車ス、若栗新田村ヨリ棚倉住居旧藩士ノ出迎タルニ、三名
及至八、九名ニ逢フ、東白川郡堤村ニ至レハ出迎タル旧藩士四十余名ニ逢ヘ
リ、二時過キ上台村ノ曠野ニ小休ス、同村住居松本平八所有ノ化石ヲ覽ル、
暫時ニシテ発ス、上台村ニテ三十余名ニ又タ逢フ、三十分、東白川郡棚
倉新町佐川某方ニ着ス、同所ニ出迎タル人々ニ面会ス、暫時休息ノ後チ、
道筋迄テ出迎タル旧藩士ニ面会ス、西白河郡釜子村ヨリ堤村ヲ経テ上台村
迄テ街道ノ左右ハ概ネ曠野ナレトモ殆ント半ハ田畑ナリ、地質ハ白河駅ヨ
リ棚倉駅迄テ浅赤色・黒色ノ砂土ニテ数ヶ所ニ「ライプルマーク」ヲ存ス
ルヲ見受タリ、本日早朝ヨリ曇天ノ処、前十時半頃及ヒ後二時過キ兩度ニ
微雨降りシガ、四時過キニ至テ稍々晴天トナル、里程五里廿二丁廿四間半
十日、雨風、早朝ヨリ旧藩士ニ面会ス、十時過キヨリ南郷住居三十余名ニ
面会ス、十二時半過キヨリ三十余名ヲ招キ酒宴ヲ開ク、央ナル頃口旅寓ヲ
出ツ、時ニ第二時ヲ過ク、同三十分馬場村ニ至ル、都々古和氣神社ニ参拜
ス、牧村、鈴木直、関口、中山、等ノ諸氏従ス、関口、中山、二氏ヲ歸路
馬場村ヨリ帰郷セシム、夫ヨリ牧村、鈴木、二氏ヲ従ヘ北町板庫ニ至ル、
吉田、川澄、二氏立会ニテ一覽ス、夫ヨリ川澄氏ノ宅ニ至リ隠居ニ面会ス、
兼テヨリ協同社ノ招待ニ依リ、隠居ニ別ヲ告ケ、直チニ北町通ニテ長久寺

ニ至レハ、協同社々員一同門内ニ列立スルニ付、会釈ス、社員先導ニテ設
ケノ座敷ニ着座ス、時ニ第四時ヲ過ク、暫クシテ社員列座ニ付、一礼ヲ終
リ、本日招待ニ預リシ辱キヲ述フ、暫時對話ノ後チ、酒宴開キタリ、該社
ハ貸附会社ニテ社員モ四十余名アル由ナリ、八時過キ旅寓ニ歸ル、従者ハ
牧村、櫻井、鈴木、小林、ノ諸氏ナリ、南郷住居之面々ハ五時過キ一同退
散ノ由ヲ留居ノ者ヨリ聞ケリ

十一日、晴、微風、前八時ヨリ蓮家寺ニ趣キ直チニ戊辰戦死者ノ法会ヲ執
行ス、十一時過キ終ルニ付、戦死者ノ霊ヲ拝ス、次ニ家扶拝ス、次ニ遺族
ノ面々ヲ拝ス、次ニ自拝人拝ス、法会ニ臨席ノ総人数九十有余、其内遺族者
四十六人ナリ、歸路、心月院殿始メノ墓ヲ拝ス、次ニ戦死者ノ墓碑ヲ拝ス、
十二時過キ旅寓ニ歸ル、後二時ヨリ旧城内撃劍場ニ趣キ劍・棒両術ノ試合
ヲ覽ル、該場ハ宮田氏ノ設立ニ係ル、而シテ同氏ノ請フ処ナリ、三時過ギ
旅寓ニ歸ル、同三十分ヨリ蓮家寺ニ趣キ、棚倉及ヒ近傍住居ノ旧藩士ヲ招
キ送別ノ宴ヲ開ク、参集スル者百二十有余人ナリ、六時過キ宴終リ一同退
散ス、依テ旅寓ニ歸ル

十二日、快晴微風、前七時頃ヨリ鈴木、山岡、秋元、ノ諸氏来リ、化石、
木炭、貝石、ヲ持参ス、上台村住松本平八所有ノ化石数片ヲ同村住田沼忠
次郎持参ス、面会ノ上、右化石ハ何年何月何村何山ヨリ掘出タル明細
書ヲ認メ差出ス由ヲ依頼ス、以上余ガ請フ所ナリ、右木炭、木化石、貝石、
等ノ性質及ヒ地上ニ露出スル位置ヲ以テ推察スルニ棚倉近傍六、七里内外
ノ地ハ前世界ノ「デスマル、スワンプ」(沼地森林ノ義ナリ)ナルベシ、
右証跡ヲ陳レハ左ノ如シ、棚倉地内根小屋川(久慈川ノ支流)底盤ハ木炭
ヨリ組立ルナリ、其他兩三ヶ所ニ露出ス、右証ヲ以テ見レハ棚倉ノ地盤ハ
木炭層ナルベシ、又タ板橋流兩村山中ヨリ大木ノ化石出スルヲ見レハ兩村
ノ地盤モ往古ノ森林ト想ル、又タ西河内村山中ヨリ貝石ノ出ツルヲ見レハ
同村及ヒ近傍モ往古ノ海底ナルベシ、而シテ西白河郡釜子、若栗新田、兩
村間ノ地盤ニ「ライプルマーク」(波浪ノ義)ヲ存スルアリ、之レ往古
ノ河底ト推察セラル、十時過キヨリ森氏棚倉小学校生徒富沢直禮(十三年
ノ九月)西村神八郎(十三年)、国島孟鑑(十一年ノ四月)等ヲ召連

レ旅寓ニ来リ、小学科目書ノ講義ヲ聴聞ニ入レン事ヲ請フ、之ヲ諾ス、森氏附添ニテ富沢氏日本略史、西村氏日本地誌、国島氏初学須知等ヲ講義ス、十一時過キ森氏同道ニテ退散ス、後三時過キ田沼、江守、両氏来リ化石明細書ヲ差出ス、(右書面別冊ノ二記ス)後六時過キヨリ棚倉住居平民四十有余名旅寓ニ来リ招待ス、十時過キ一同退散ス

十三日、晴微風、前一時恒屋氏東京へ出立ス、七時過キ吉田、森、両氏ヲ從へ棚倉ヲ発車ス、上台村坂下ニテ送リ来ル旧藩士ニ別ル、九時三十分釜子村農家ニ休ム、当村元問屋有賀與平ニ面会ス、白河へ帰宅ノ者及ヒ棚倉ヨリ送リ来ル面々モ休息ス、齋田氏ハ過刻ヨリ休息シ居タリ、若栗新田当村間ニテ水晶類ノ族ヲ拾フ、又タ「ライプブルマーク」存スル砂土ノ塊ヲ掘採ス、二品共地面ニ露出ス、九時五十分発車ス、当村ヲ距ル五、六町ニ白河、河原田ノ追分アリ、此処ニテ白河へ帰宅ノ者五名ニ別ル、是ヨリ先キ齋田氏ヲ北平山穂積方へ先発セシム、河原田村手前大隈川々原ニテ棚倉ヨリノ十一名ニ別ル、櫻井、大輪、小林、ノ三氏ハ私用ニテ岩瀬、安積、両郡へ趣クニヨリ途中迄テ同道セン事ヲ請フ、之ヲ諾ス、河原田村中央ヨリ左ニ折レ関和久村ヲ経、十二時過キ北平山村穂積方ニ着ス、隠居夫婦ニ面会ス、齋田氏過刻ヨリ待居レリ、後チ昼食ヲ喫ス、小林、櫻井、両氏ヲシテ車ト共ニ泉崎村迄テ先行セシム、二時過キ隠居ヲ案内者トシ、吉田、森、大輪、齋田、等ヲ從へ発ス、鳥峠東方ノ麓ニテ齋田氏ニ別ル、二十余丁ニテ頂上ニ達ス、時ニ三時半ナリ、平垣ノ地凡ソ三反余、中央ノ小丘ニ南面シテ稲荷ノ祠アリ、参拝ス、後チ社務所ニ休息中近傍ノ地形ヲ図ス、(因ニ曰ク鳥峠ハ磐城ノ西白河郡泉崎村地内ノニテ甲子山脈ヨリ白河駅ノ背面ヲ走りノ東方ニ突出シタル山脈ノ端トス)四時過キ社務所ヲ出ツ、西面ノ山道ヲ下ル、十八丁余ニシテ泉崎村地内ノ耕地ニ至ル、十五、六丁ニテ泉崎村ニ達ス、穂積隠居ニ別ル、当村小学校教員山本與一郎ニ面会ス、暫ラクシテ乗車ス、矢吹原ヲ通り六時過キ、中畑新田村ニテ陸羽街道ニ出ツ、七時前岩瀬郡矢吹駅ニ着、横川英次方ニ泊ス、有田、石井、村社、ノ三氏来ル、九時過キ退散ス、櫻井、大輪、小林、モ同宿ス、里程左ノ如シ、棚倉二里十三丁五十一間、釜子二十四丁、関和久五丁、北平山一里半、泉崎一

里廿町、矢吹合テ五里五十一間

十四日、晴微風、前六時三十分矢吹駅ヲ発ス、吉田、森、櫻井、大輪、ノ諸氏從フ、小林氏ヲシテ荷物ニ付添ヒ須賀川駅へ先発セシム、矢吹駅ヲ距ル廿四丁、岩代国岩瀬郡久米永村ヨリ長沼道ニ入ル、同郡保土原、矢田野、両村ヲ経、九時過キ鉾衝村室田氏ノ宅ニ至ル、矢田野村ニテ櫻井氏ニ別ル、暫ラクシテ室田父子ニ面会ノ上、先年ノ礼ヲ述へ後チ雑話ス、同三十分頃、矢吹ヨリ岡本氏来ル、十時過キ父子案内ニテ坂ヲ登リ鹿島神社境内ニ至ル、神殿ニ参拝ス、後チ境内ヲ一覽中去ル戊辰ノ年乱ヲ避ケ室田氏ノ宅ニ寓スル頃、屢バ当山ニ遊ヒタル情態ヲ思出シ、父子ト歩ミツ、雑話セリ、村境ニテ室田父子ニ別ル、大輪氏ニ又タ別ル、矢田野村ニテ甲斐父子ニ面会ス、男某泉田村迄テ案内セント請フ、之ヲ諾ス、積賀堂川支流(矢田野泉ノ田村境)ヲ渡リ泉田村ニテ甲斐氏ニ別ル、稲村ヲ経、三時三十分同郡須賀川駅ニ着、三谷屋ニ休ム、同家ニ小林、鈴木、両氏待居レリ、鈴木氏ハ郡山へ帰村ノ由ナリ、昼食ヲ喫ス、後チ旧藩士六名及ヒ当駅平民石井常女ニ面会ス、鈴木、小林、両氏ヲ宿割トシテ桑野村へ先行セシム、四時前吉田、森、両氏ヲ從へ駅車(人力ノ車)三輛ヲ雇ヒ発車ス、大隈川ヲ渡リ石川郡江持村ニ至ル、夫レヨリ日出山ヲ経へ八時過キ、安積郡郡山駅ニテ下車ス、九時過同郡桑野村ニ着、白河屋勇藏方ニ泊ス、郡山住鈴木賤勇来ル面会ス、鈴木直、小林某、モ来ル、三氏共十時過キ退散ス、(鈴木兄弟ハ郡山へ小ノ林ハ福島県出張所へ帰ル)是ヨリ先キ保土原、矢田野、鉾衝、泉田、村迄テ青田多シ、同村ヨリ稲村ヲ経、須賀川駅迄テ平原多シ、地質ハ矢吹駅ヨリ当駅迄テ河原砂ノ層ナリ、当駅ヨリ江持、守山、西村ヲ経、郡山駅迄テ地質ハ河原砂ニテ桑畑多シト雖トモ江持原、守山原アリ、当駅ヨリ桑野村迄テ地質ハ粘土ニシテ畑多シトス、本日泉田・須賀川間ニテ微雨ニ逢フ、須賀川ニテ岡本氏ニ別ル、又タ車夫佐助ヲシテ帰京セシム、里程左ノ如シ、矢吹二里半、鉾衝三里、須賀川一里十六丁、守山一里廿八丁、郡山廿丁、桑野村合テ八里廿丁

十五日、晴微風、前七時過キヨリ鈴木兄弟、小林来ル、九時過キ鈴木弟ヲ留居トシ、小林、鈴木兄弟ヲ案内者トス、吉田、森ヲ從へ旅寓ヲ出ツ、大神

宮社前ヨリ内務出張所前ヲ過キ二、三丁ニシテ右ニ折レ、新田ノ辺ヲ通り開成沼、次ノ沼界ノ土手ヲ通り郡山道ニ出ツ、一、二丁ニテ左ニ折レ、大藏垣原道ニ入ル、二十丁余ニテ久留米開墾所ニ至ル、一覽ノ後チ大槻村ヲ經、十一時過キ旅寓ニ歸ル、(當所記ノ事ハ別ノ冊ニノ記ス) 昼食ヲ喫ス、正午過キ鈴木兄弟、小林ノ三氏、郡山駅迄テ送ラント請フ、之ヲ諾ス、後一時過キ吉田・森ヲ從ヘ桑野村發ス、二時十五分郡山駅ニ休ム、鈴木兄弟、小林等ニ別ル、駅車ニ乗り發ス、三時半同郡高倉村立場ニ休ム、暫クシテ發ス、安達郡本宮駅ヲ經、七時半同郡二本松駅ニ着、翁屋ニ泊ス、地質ハ郡山駅ヨリ當駅迄テ砂地ニシテ往古ノ沼地ト想ル、里程左ノ如シ、桑野卅丁、郡山二里十七丁六間、高倉一里六丁五十七間、本宮二里廿三丁三十三間半、二本松合テ七里五丁六間半

十六日、晴微風、前五時半過キ吉田、森ヲ從ヘ安達郡二本松駅ヲ發車ス、(駅車ヲノ雇フ)、七時三十分信夫郡松川村立場ニ休ム、十時前同郡福島駅ニ着、森田屋ニテ昼食ヲ喫ス、二本松駅ヨリ當駅迄テ地質ハ火山層トス、就中最モ明瞭ナル証跡ヲ表ハ伏拝坂ナリ、之ヲ以テ考レハ往古ニ在テ安達^{アタタ}太良山(俗稱二本松嶽火山)ハ猛烈ナル数度ノ發裂ヲ為シタルト想像セラル、十一時過キ福島駅發車ス、(駅車ヲ雇)、十二時過キ同郡瀬ノ上駅立場ニ休ム、後一時四十分上飯坂村ニ着ス、堀切氏案内ニテ佐藤謙次(新涌屋トノ稱ス)方ニ旅寓ヲ定ム、福島・瀬ノ上兩駅ノ間青田多シ、夫ヨリ當村迄テ地形平坦ニシテ精良ノ桑畑夥多アリ、地質ハ河原砂ニ小石ヲ混合セシモノトス、五時ヨリ吉田同道ニテ堀切氏ノ邸ニ趣ク、戸主良平并ニ繼母ニ面會中談適々養蚕ノ事ニ移リシトキ、余、堀切氏ニ問フ、養蚕扱方ヲ心得タル者アラバ呼ビ質問セントス、氏諾ス、暫クシテ二人來ル、直ニ質問ス、七時前氏ノ邸ヲ出ツ、歸路氏ノ桑畑ヲ覽ミ、夫ヨリ戸主同道ニテ、祖父某ノ墓所ニ至リ墓ヲ拜ス、同三十分旅寓ニ返ル、里程左ノ如シ、二本松二里八丁十七間、松川一里十七丁廿三間半、清水町一里廿三丁五間半、福島一里廿二丁五十九間、瀬ノ上一里十三丁三十五間半、合テ八里十二丁四十間半十七日、快晴微風、前五時過キ瀧ノ湯温度ヲ量ル、百三十度弱ナリ、六時過キ堀切氏繼母來リ、昨日來車ノ礼ヲ述フ、同卅分帰宅ス、七時前良平來

リ供給セント請フ、諾ス、直チニ酒宴ヲ開レリ、安藤長四郎男某來リ繭ヲ与ヘリ、八時前終ル、吉田・森ヲ從ヘ同十五分佐藤方ヲ發車(駅車三輛堀切氏ノニハ馳走ナリ)ス、堀切氏尾車ス、十時前、瀬上駅立場ニ休ム、堀切氏ニ別ル、直チニ發ス、福島ヲ經、伏拝坂迄テ道路平坦ニテ千住・草加間ノ路ニ似タリ、後一時半過キ浅川村ニ小休ス、二時四十分松川立場茶屋ニテ昼食ヲ喫ス、四時半安達郡油井村ニ小休ス、六時前、同郡二本松駅ニ着(福島ヨリ當所ノ迄テ歩行ス)、駅車ヲ雇ヒ發ス、七時前安達郡本宮駅ニ着、宿屋ニ泊ス、本日暑氣甚シク旅行中ノ大暑ト云ヘシ、里程十一里十四間

十八日、快晴微風、前五時安達郡本宮駅ヲ發車ス、(駅車ヲノ雇フ) 七時、安積郡高倉村立場ニ休ム、八時過キ同郡々山駅ニ至ル、中学校構内寓鈴木某ノ宅ニ行キ面會ス、同三十分發ス、(駅車ヲノ雇フ) 十一時二十分前岩瀬郡須賀川駅小林某方ニテ昼食ヲ喫ス、十二時過キ發ス(駅車ヲノ雇フ) 同郡鏡田村ヨリ右ニ折レ、牧ノ内道ニ入ル同郡保土原・飯豊兩村ヲ經、三時半白子村農家ニ休ム、上下松本兩村ヲ經、五時過キ同郡下牧ノ内村ニ着○旧庄屋「小島岩司」案内ニテ會津屋ニ投宿ス、須賀川駅ヨリ鏡田村迄テ路傍畑多シ、同村ヨリ保土原村手前釈加堂川迄テ二十余丁ノ間、原ニテ松林諸所ニ在リ、保土原村ヨリ當村迄テ左ハ權田倉山ノ支脈ニテ松杉及ヒ雜木茂生シ、右ハ天栄山ノ支脈ニシテ重ニ松林多シトス、右兩山脈ノ間ニ耕地アリ、広キハ十五、六丁ヨリ狭キハ六、七丁ニ及フ、右耕地ハ旧白川領内第一ノ良田ニテ地質ハ上等ノ肥土ナリ、地形ハ當村ヨリ須賀川近傍迄テ次第ニ斜面ヲ為ス、保、飯、白、ノ三村ハ農民ノ居宅内ニ必ス菜蕒樹五、六本在リ、余其故ヲ知ラス、夕食ノ節、旧庄屋某ノ供応ニ預タリ、後チ某ニ當村ノ物産及ヒ地質ヲ問フ、杉、松、栗、檜、櫻、セノ木、カヤ、ヨモギ、ヨシ、蕨、紫蕨、宇土、欽冬、山鳥、雉子、駒鳥、熊、鹿、猪、青猪、及ヒ米、麦、稗、等ナリト答フ、九時過キ、須賀川ヨリ小林榮吉來リ吉田ニ面會シ、本日斯々ノ次第故ヘ面謁セント云フ、之ヲ諾ス、対面中、氏申ケルニ今ヨリ夜行ニテ帰宅セントス、余曰ク夜行ヲ止メ、明日帰宅ノ方然ル可クト申シタルニ其言ニ從ヒ泊ス、十時前、庄屋某ニ明日天栄山ヘ登山ス

ルニ付、案内人ヲ差出スヲ約ス、某諾シテ退散ス、当座敷ハ庫座敷ニテ入口ノ外南ニ一ツノ窓アリ、開キ外ヲ望メハ晴天満月ニテ恰モ白昼ノ如シ、月光順風ト共ニ入来リ、稍々冷キヲ覺レトモ座中ハ熱氣去ラスシテ夏期ナレトモ、外ヲ望メハ秋期ノ寛ヲ為セリ、里程左ノ如シ、安達郡本宮六里卅三丁廿二間、岩瀬郡須賀川二里、保土原廿五丁、飯豊十八丁、白子一里廿二丁、松本十八丁、下牧ノ内合テ十里十六丁廿二間

十九日、晴微風、前七時三十分吉田・森両氏ヲ従ヘ下牧ノ内村ヲ発ス、○旧庄屋〔○北畠岩司〕及ヒ案内者二人先導ス、村口ニテ小林氏ニ別ル、八時半、上牧ノ内村字瀧田農家ニ小休ス、下牧ノ内村を距ル一里余トス、木標ニ左勢至堂、右湯本道ト記セリ、当村ハ山間ノ寒村ニテ、氣候ハ東京ノ四月ノ氣候ニテ梅、李桃ノ実青々トシテ未タ黄色ヲ佩ヒス、麦作ハ刈始メタル様子ニテ茄子、胡瓜、ハ漸ク花開キ始メリ、暫クシテ発ス、字瀧井ヨリ工夫一人先導ス（因ニ曰ク二、三年前開坑ノ頃世話ノ人ニテ稍々鉦業ニ明キ人物ナリ）、檜林ヲ通リスケ、坂路ヲ登リ始タル処ニ小流アリ、木片ノ橋ヲ架ス、斯ニテ旧庄屋ニ別ル、天栄山南麓ニ位スル処ナリ、迂回シテ西麓ニ至ル、谷川ヲ隔テ、権田倉山ニ相對ス、字瀧田ヲ距ル一里十丁余ナリ、道ナキ草原ヲ登ル事一里余ニシテ、十時過キ製金所ニ達ス、舎内ヲ覽ルニ器具及ビ廢鉢等散在スルヲ思ヘハ今ハ廢業ノ模様ナリ、清水涌出スル小流アリ、依テ弁当ヲ使フ、暫時休息ノ後チ岩上ヲ登ル、六、七丁ニシテ坑口ニ達ス、十一時ヲ過ク、坑口ハ山頂ヨリ六、七十間ノ所ニ在リ、坑内ヲ一覽ス、（天栄山記事ハ別冊ニ記ス）後一時前發ス、古木ノ茂タル嶮キ「スルプ」ヲ下リ谷川ヲ添テ行ク事二十余丁ニシテ、小高キ処ニ出ツ、則チ湯本道ナリ、路傍ニ古ヒタル墓アリ、之レ昔日天栄山ヨリ鉦金ヲ発見セシ、坑夫ノ墓ト云フ、経過セシ蔭地ニ苺、アスナロー、ノ茂タルアリ、牧ノ内村ヨリ先導ノ坑夫、案内人ニ別ル、此処ハ「ホー」坂ノ登口ナリ、谷川ヲ添テ山間ニ入レハ大樹四圍ニ林立シ、時々駒鳥ノ美声ヲ聴ク、案内人ニ別レシヨリ、二十余丁ニシテ羽鳥村ヘ荷物ヲ附ケ先行セシメタル馬ヲ引キツ、歸り来ル、農夫ニ逢タリ、二十余丁ニシテ「ホー」坂ノ峯ニ達ス、路傍ニ小舎在リ、老夫婦及ヒ犬一頭・馬三頭住ス、小休ス、時ニ二時十五

分ナリ、牧ノ内字瀧田ヨリ天栄山ヲ越ヘ当所迄テ山中檜、栗、白雲木、多シ、暫クシテ發ス、峯ヨリ三丁余ノ処ニ羽鳥、牧ノ内村境ノ木標アリ、下リ三十余丁ニシテ羽鳥村ニ至ル、「ホー」坂ノ峯ト当村ノ間ニ柏、檜、クノ木、多シトス、当村ノ産物ハ馬、人參、麻、稗、等ナリ、農家ニテ昼食ヲ喫ス、下牧ノ内村ヲ距ル事三里半ノ処、天栄山ヲ越タルニ付、六里余ナリ、三時半發ス、鶴沼川ノ右岸ヲ添テ坂路ヲ行ク、一里余ニシテ大平村ニ至ル、羽鳥村ヨリ当村迄テ路傍ノ山々ニ樹木茂生ス、地質ハ浅水色ノ砂土ナリ、当村ノ山中ヨリ陶土ヲ産ス、（因ニ曰ク世情ニ会津ノ焼ト称スル陶土ハ会津郡中ヨリ産スルニアラズシテ岩瀬郡大平村ヨリ産スルナリ）、村迹ニテ鶴沼川ヲ渡リ左岸ヲ添テ田良尾村ニ至ル、山間ト雖トモ田畑アリ、産物ハ馬、人參、稗、蕨、等ニシテ、山中ニハ柏、ブナ、檜、等ヲ産ス、字野中川ト云フ処ニ温泉アリ、涼泉故ヘ眼病ニ適ト云フ、地質ハ深黒色ノ砂土ニテ信州伊那郡清内路ノ地質ニ似タリ、野中川ヲ距ル十八丁余ノ処ニ三面山脈ヲ帯ビタル村落アリ、湯本村ト称ス、六時過キ岩瀬郡湯本村ニ着ス、星彦次右衛門方ニ投宿ス、羽鳥村ヲ距ル三里合テ、九里三十丁（当村記事ハ別冊ニ記ス）

二十日、晴微風、前、引湯温度ヲ量ル、一番百十度四分、二番百十度、涌出ノ度ヲ量ル、百二十度同所ノ模様ヲ図ス、後二時過キヨリ吉田氏同道ニテ鶴沼川ニ行キ漁ス、水中ニテ両三度転ヒタリ、四時過キ旅寓ニ歸ル

二十一日、曇風前八時、案内者一人ヲ雇ヒ、吉田、森、二氏ヲ従ヘ湯本村發ス、六、七丁ニシテ谷川ヲ渡リ（鶴沼川ノ支流ニテ水源ノ一岐嶽ニ發ス）山道ニ入ル、之ヲ田嶋本道ト称ス、鶴沼川ノ左岸ヲ添テ行ク、二十余丁ノ処ニ「スガ」峯アリ、之ヲ岩瀬、会津、両郡ノ境トス、一里余ニシテ鶴沼川ヲ渡リ南会津郡枝松村ニ至ル（当村ハ鶴沼川ノ右岸ニ位ス）山間ノ僻地ト雖トモ人家十有余戸在リ、物産ハ人參、葛粉、蕎麦、材木、等ヲ産ス、当村迄テ路傍ニ古木繁茂セリ、村ノ中央ヨリ左ニ曲リ鶴沼川ヲ再渡シ、山路ヲ行ク、一里余ニ古木ノ繁タル森ノ中ニ古祠アリ、如何ニモ寂寞タル有様ニテ数百年ヲ経タルモノト思レタリ、一ツノ老木ニブント啼ク声アリ、望見スレハ蜜蜂群衆シ蜜ヲ作ラント勞力スル様子ニ見受ケリ、夫ヨリ「オ

リブキ」峠ニ登ル、頂上ニ至リシトキ北方ヲ望メハ遙ニ白キ処アリ、彼ノ白キ処ハ猪苗代湖ナルヤト聞タルニ、案内者申ケルニ彼ノ白キ処ハ湖ニ非ス、有名ナル飯豊山イデザン（羽、越、岩代、三ノ州ニ跨ル）ノ七、八合目ヨリ頂上迄テ積雪ノ消サル処ニシテ彼ノ山ハ年中積雪ヲ存スト答ヘリ、下リ口ニ至レハ眼下ニ四面山脈ヲ負ヒタル耕地ヲ覽ル、之レ旧会津御藏入則チ南会津郡田嶋耕地ナリ、南北凡ソ八、九里、東西凡ソ四、五里トス、大川（水源ヲ下野国境荒貝岳ニ発シ河ノ沼郡立川村ニテ日橋川ニ入ル）中間ヲ貫ク故ニ水利ニ便ナリ、坂路ヲ下ル一里余ニシテ白岩村ニ達ス、時二十二時ヲ過ク、枝松村ヲ距ル四里余トス、枝松村ヨリ当村迄テ地質ハ深黒色ノ砂土ニテ「オソブキ」山中栗、櫛、葛、蕨、等繁茂ス、農家ニ休ミ弁当ヲ使フ、当村ハ田島耕地ノ東北隅ニ在テ大川ノ右岸ニ位ス、田島ヲ距ル六里余トス、地質ハ名ニモ違ハス浅青白色ノ土ナリ、然レトモ外皮ハ黒色ノ土ニテ物産ハ人參、陸穂、稗、カンプラ芋、インゲン、豆等ヲ産ス、「インケン」ハ當時花ヲ開キ、稍々種子ヲ結ヒ始メリ、茄子、胡瓜ハ未タ花ヲ開サル様子ニテ、稻ハ一番草ヲ終リタル位ニテ、氣候ハ東京ノ四、五月頃ナリ、同三十分農家ヲ出テ川ノ右岸ヲ添テ行ク事、十八、九丁ノ処ニ「トオーヘツル」ト称スル、天然ニ成立ル名所アリ、川ノ両側ニ絶壁対立シ水平ヨリ高サ數十丈ニ及フ、松、紅葉等岩ノ裂目ニ茂生ス、又タ水中ニハ奇ナル岩石ノ出沒スルアリ、川ノ右岸ヲ行キ迂曲シタル処ヨリ經過セシ先ノ絶壁ヲ望メハ景色奇ナリ、美ニシテ実ニ筆記シ難キ場所ニテ如何ナル画工ト雖トモ、望観スルノ外術ナキト思ル、余、同行四人ト暫時止マリテ詠タリ、余想フニ当景色ヲ現出セシ原因左ノ如シ、往昔洪水アリ、地皮ヲ洗流シ堅キ岩骨ヲ現ハシタルニテ質ハ「カルカリヨウス、ロック」ノ層ト推察セラル、形状ハ恰モ畳ヲ積重タル如シ、所謂「チルテッド」ノ層ナルヘシ、色ハ青白色ナリ、杖ヲ以テ打テバ二、三寸位ノ片ニ碎ケ、又ハ飛散ス、之ヲ以テ見レハ河底ニテ全ク洪水ノ為ニ出来タルモノト想像セラル、東白川郡矢祭山ニ肩ヲ列セル度ノ景トス、一時二十分帰路ニ付ク、再び白岩村ヲ経「オソブキ」峠ニ登リ、枝松村道ニ入スシテ、二岐湯泉道ニ入り、山間ノ草原ヲ行ク、一里半ニシテ象根村ニ至ル頃、降雨ニ逢フ、白岩村ヨリ当村迄テ柏、

栗、蕨等アリ、夫ヨリオソブキ峠ノ連脈ニテ高サ殆ント倍スル、○「湯坂」峠ニ登ル、二里余ニシテ頂上ニ達ス、南ニ二岐嶽アリ、西ハ眼下ニ田嶋近傍ノ山脈アリ、北ハ遙カニ若松近傍ノ山脈連亘シ、東ハ「バーリー」ヲ隔テ、甲子山ノ諸峯並立ス、二十余丁ニシテ東方ノ崖ニ至ル、坂路ヲ下ル、一里余ニシテ先キニ渡リシ谷川ノ辺ニ達ス、五時過キ湯本村旅寓ニ歸ル、象根村ヨリ山中柏、櫛、栗、蕨、紫蕨、葛、ギボシ等ヲ産ス、里程合テ十一里余
二十二日、曇微風、後二時十五分過キ森氏ヲ從ヘ湯本村発ス、星氏隱居某二岐道入口迄テ先導ス、畑中ノ小道ヲ行ク、十丁余ニテ草深キ故ヘ、道ヲ見失ヒ櫛林ヲ吟行スルニ至レリ、前後ヲ望メハ、凡ソ三里四方モ広キ平原ニテカヤ、蕨、繁茂ス、方向ヲ定メ南面シテ直線ニ行ク事、十七、八丁ニシテ漸ク小道ニ出ツ、之レ慥カニ二岐道ト思ヒ、老木ノ茂タル山中ヲ行ク、一里余リニ嶮坂アリ、下リテ谷川ヲ渡リ温泉場ニ至リ、湯守ノ家ニ休ム、時ニ第三時ヲ過ク、主人ニ温泉発見年元及ヒ二岐嶽地質ヲ質問ス、後チ涌出ノ景ヲ図ス、（温泉及ヒ二岐記事ノ別冊ニ記ス）四時過キ帰路ニ付ク、二十余丁ニシテ蔭地ニ美々タル花草茂生ス、根ヲ掘取り、六時過キ湯本村旅寓ニ歸ル、里程往返四里
二十三日、晴微風、前七時案内者○「湯本村農星常次郎、星徳之助」二名ヲ雇ヒ、吉田・森二氏ヲ從ヘ、湯本村星彦次右衛門ヲ發ス、隱居某先導ス、十八丁ヲ距ル田良尾村字野中川ニテ隱居某ニ別ル、之レヨリ山道ニ入ル、（之レ則チ白川ノ布引山ナリ）柏林ヲ行ク、二里余ニシテ頂上ニ達ス、南北三里余、東西二里余ノ平原ニテ、地形ハ鎌房山ヨリ東北ニ向テ斜面ヲナス、西、北ノ「スループ」ニ柏及ヒ雜木繁茂セリ、頂上ニ樹木非スシテ蕨屬及ヒカヤアリ、滋地ニ花菖蒲今ヲ盛ト花咲ケリ、二里余ニテ東崖ノ端ニ至レハ白河及ヒ近傍村落ヲ望ム、中モ白ク見ユルハ白河警察所ナリ、斜メニ左方ヲ望メハ矢吹、須賀川、郡山、ノ近傍ナリ、右方ヲ望メハ国境ノ小山脈ヲ越ヘ、那須野近傍重ニ大田原ノ辺ト想ハレタリ、下リ一里余ニテ五輪平ニ至ル、布引山ノ東崖ニ戊辰ノ年会藩築キタル台場ノ跡ヲ存スル所四、五ヶ所アリ、草深キ処ハ頭上二尺余ニ及フ、六、七丁ニテ羽鳥村ヨリノ甲子道ニ合ス、二、三度小川ヲ渡リ行ク事一里余ニ追分ノ木標アリ、右柏

小屋道左○道ト記セリ、柏林ヲ行ク一里余ニシテ、小丘ヲ越タル処ニ清水アリ、依テ木陰ニ座シ、弁当ヲ使フ、目前ニ雜草ヨリモ一層高ク茂タル蕨族アリ、葉ハ蘇鉄ニ似テ茎ハ蒲穂色如キ薄毛ヲ以テ包メリ、織物ヲ作ル品ニ適スベシト思ヒ、摘採タリ、暫クシテ発足ス、次第ニ小峯ヲ越ヘ小流ヲ渡リ、又峯ヲ越ヘ、大隈川ノ左岸ニシテ馬立ノ対岸ニ至ル、先キニ休息セシ処ヨリ三里余トス、下リ二十余丁ニシテ大隈川ノ辺ニ至ル、川ヲ渡リ甲子温泉場ヨリ廿七丁目之処ニ出ツ、山間ヲ通り四時過キ西白河郡甲子温泉場ニ着、湯小屋ヲ旅宿トス、野中川ヨリ布引山、五輪平ヲ経テ、大隈川左岸迄テ地質ハ深黒砂土ニテ信州清内路ノ色ニ似タリ、廿七丁目ヨリハ火山層トス、馬立対岸ヨリ二里余ヲ距ル山腹ニ山小柳草ヲ見受タリ、湯本村ヨリノ案内者帰村ノ旨ヲ申ケルニ付、一泊スヘシト申付タリ、六時過キ湯本ヨリ星氏杖ヲ持参ス、今朝出立ノ砌、失念セシ品ニ付、厚ク礼ヲ述ヘ、一泊ヲ申タル処、四、五日滞留ノ由ヲ答ヘリ、本日ハ棚倉発足以来第一ノ山越ニテ吉田・森ヲ始メ案内者ニ至ル迄テ草臥ヲ堪ヘカメルニ至レリ、里程十一里廿九丁

二十四日、晴微風、前八時過キ温泉流出ノ度ヲ量ル、元湯百二十度、冷湯百二十度ナリ、十一時過キ棚倉ヨリ牧村氏着ス、発足後ノ模様ヲ尋問ス、後二時過キ元湯へ架タル橋ヨリ下流ニテ「ゴカイ」二十疋ヲ捕ス、旅寓ニ持参シ「アルコール」ノ「ビン」ニ漬ケリ、長サ一寸二、三分ヨリ六、七分ニ至ル、五時過キ沐浴ノ折、泉ヲ二、三合ツ、「ビン」ニ詰メリ、(温泉記事ヲ別冊ニ記ス)

二十五日、雨風、滞在

二十六日、雨微風、後六時過キ菊多郡上遠野郷ヨリ松澤、大地、ノ二氏入浴トシテ着場ス、直チニ面会ス、七時過キ旅宿へ歸タリ、九時過キ牧村・星ノ二氏ト同道ニテ冷湯へ入浴中他人一人モ居ス、夜ハ次第ニ深更ニ向ヒ煙霧深シテ、前後ヲ見ヲ得ス、大隈川ノ水瀬高クシテ心細ク為レリ、十時前旅寓ニ返ル

二十七日、吉田・牧村・森三氏ヲ従ヘ、前八時甲子温泉場発ス、廿丁余ニテ送り来ル、星氏ニ別ル、大隈川ノ右岸ヲ添テ九時馬立ノ小舎ニ小休ス、

甲子ヨリ一里ノ山道ニテ老木繁茂ス、暫時ニシテ発ス、一里余ノ山野ヲ通り清水ノ小舎ニ達ス、二里余ノ曠野ヲ通り、一時前折口村ニ至ル、今経過セシ処ハ追原ニテ柏木夥多シク茂生ス、半里手前ニテ降雨ニ逢フ、農家ニテ昼食ヲ喫ス、農夫ヲ雇ヒ馬一頭ニ荷物ヲ付ケ、同三十分発ス、平原(一名折口ノ原ト称ス)ヲ行ク、一里余ニ大田原道・白河道ノ追分アリ、此処ニテ吉田氏ニ別ル、小田倉村ヲ経、黒川村ニ至ル、当村ノ南口ニ小川アリ、橋ヲ架ス、之レ高名ナル黒川ニテ野州芦野駅ノ裏手ヲ流レ終ニ那珂川ニ合ス、此川ヲ以テ下野、磐城、ノ国境トス、折口村ヨリ当村迄テ平原ニテ、中ニモ小田倉ヨリ当村迄テハ谷地ニテ地質ハ深黒砂土トス、数ヶ村ヲ経、九時前野州那須郡高久村ニ着、櫻屋ニ泊ス、当村手前二里余ニシテ夜ニ入り、且ツ悪路ニテ大ニ難渋セリ、折口村ヨリ八里ノ間所謂那須野、平原ニシテ地質ハ黒色ノ砂土ニテ当村ヲ始メ経過セシ村々及ヒ近傍数里ノ間稗、甘薯、等ヲ産スル外他ノ植物ヲ産セス、故ニ村民ハ稗、甘薯ノ二種ヲ常食トス、早朝ヨリ暴風雨ノ模様ヲ視セリ、四時過キニ迄テ止ミ稍々晴天ト成ル、本日ノ里数ハ白川布引山越ニ次テノ長路故ヘ大ニ歩ヲ勞セリ、牧村、森二氏モ余ト同様ナリ、里程合テ十二里余

二十八日、前五時半、馬二頭ヲ雇ヒ荷物ヲ付ケ、牧村・森二氏ヲ従ヘ高久村発ス、那珂川ヲ渡リ、八時半練貫村ニテ陸羽街道ニ出ツ、高久村ヨリ当村迄テ二里余ノ間漠々タル那須野ノ曠原ニテ地質ハ御影石雜リノ層トス、牧場ハ道ノ左右ニ在リ、去レトモ牧舎ハ遙カ西方松林ノ麓ニ在ツテ牛三十余頭ヲ有ス、之レ山形県令三島氏ノ私立ニ係ル、市野澤村ヨリ十丁余ノ処ニテ宇津木甚作ニ逢フ、大田原ニテ駅車ヲ雇ヒ乗車ス、十一時前、同郡佐久山駅ニ着、下車ス、茶屋ニテ昼食ヲ喫ス、大田原ト当所ノ間ニテ降雨ニ逢ヘリ、同三十分駅車(人力ノ車)ヲ雇ヒ発ス、一時十五分喜連川立場ニ休ム、弥五郎坂ニテ黄土ヲ採ル、後八時河内郡宇都宮ニ着、稲屋ニ泊ス、明日帰京ニ付、東京麻布邸へ電信ニテ帰京ノ由ヲ報ゼシム、練貫村ヨリ当駅迄テ十里二十四丁十六間、合テ十二里二十四丁十六間余

二十九日、曇微風、前三時過キ地震ス、五時過キ牧村・森二氏ヲ従ヘ宇都宮駅発車ス、八時二十分都賀郡石橋駅立場ニ休ム、十一時前同郡小山駅茶

屋ニテ昼食ヲ喫ス、同三十分発車ス、同郡間々田駅ヨリ間道ヲ経、二時前生井村河岸ニ着、川蒸氣永嶋丸ニ乗船ス、宇都宮ヨリ十里十六丁十七間余同三十分出発ス、古河、栗橋、境、保志花、野田、流山、松戸、市川等ノ河岸ニ立寄り十一時過キ東京本所高橋ニ着船ス、上陸セシ所口麻布邸ヨリ恒屋盛服人力車三輛ヲ従へ出迎タルニ付キ直チニ乗車ス、十二時前志ナク麻布邸ニ安着ス、本日モ昨日ノ如ク時々降雨アリ、野州生井河岸ヨリ本所高橋迄テ二十九里、合テ三十九里十六丁十七間余

総計日数廿五日ニテ里程百九十七里三十五丁四十六間

三、「棚倉紀行」内容

「棚倉紀行」は、明治一三年（一八八〇）七月五日に自宅のある東京麻布霞町を出発し、福島県白河、棚倉、二本松、福島などを経て、二九日に帰宅するまでの二五日間の詳細な記録である。大きさは、縦二八・三センチメートル、一九・二センチメートルである。「ふみ月の記」という別のタイトルもつけられている。

中身の構成は、日記形式で、日時、天気、行程（駅名、休憩所、宿泊地）などが書かれ、一日の最後にその日にどの位の距離を進んだか里程が書かれている。それだけにとどまらず、通過した場所の地質、地勢、物産、風俗など、体験、観察した様々な事項が書き留められている。また時には土地の者と交わり、質問したり、山に登ったり、温泉に行けば湯量や温度を確かめたりと、実に行動的であり、実証的でもある。

さて、正功は、なぜこの時期に棚倉を旅行したのだろうか。この「棚倉紀行」には、理由は書かれていないが、『家扶日記』の七月五日の記事によると、

一、従五位様（正功）為御墓參警城国西白河郡東白河郡棚倉江日数五十日間御暇御願濟ニ付、午前六時頃御出立被遊候、御供ハ恒屋盛庸・森順三郎罷出候

（筆者注）

とある。すなわち、棚倉に行ったのは、名目は墓参りであり、五十日間の暇をとって出かけたことがわかる。正功は、この時二〇歳。明治二年に知藩事として棚倉に赴き、四年五月に再び東京に戻った後、知事職を免じられた。それから一〇年ぶりで足を踏み入れた旧藩地であった。

この旅行の行程表（表1）と関係図を最後に載せているので、参照していただきたい。

旅の前半は、旧藩領白河や棚倉の元藩士や土地の人々との交流が中心である。七月五日に自宅を出て、日光街道、奥州街道を通り、八日に棚倉以前の藩領であった白河の地へ到着している。旧藩士たちが出迎えに来ており、白河でも旧藩士との対面、宴会が催され、交流が持たれた。

九〜十三日までは、旅の目的であった棚倉に滞在した。一日は、蓮家寺に赴き、戊辰戦争戦死者の法会を行い、旧藩士との面会や住民たちとの交流を精力的にこなしている。

一方、その間にも、たとえば十二日に鈴木、山岡、秋元の諸氏（旧藩士か）から化石、木炭、貝石を、また上台村住松本平八所有の化石片の献上を受けている。これは、正功がこのようなものを好んだことを示しているといえよう。そして面会の上、その化石は何年何月何郡何村より掘り出したかを書いた明細書を提出するようさらに要求している。化石・木炭等の性質や出土状態から、棚倉近辺の地盤について考察を加えるためであった。前述したように、正功は、洋学も学び地質学についての西洋の書籍も読んで知識を持っており、この旅は本で学んだことを実践的に試みる恰好の機会であったろう。また、棚倉を出発してから若栗新田・釜子村の間で水晶などを拾い持ち帰るなどの行動をとっており、発掘を盛んに行い、遺物を収集し、記録をつけるという、正功の後の姿を彷彿とさせる。

一四日には、鉾衝村を訪れ、戊辰戦争時に戦乱を避けて匿ってもらっていた神主室田氏と会い、当時の頃のことを懐かしく語り合っている。鉾衝神社は、鹿島大神宮を合祀し、岩瀬郡惣社であった。

戊辰戦争当時の正功の動向を記した別の文書によると、

明治元年三月陸奥国白川郡棚倉ニ赴ク、閏四月白河ニ開戦アリ、棚倉

城ハ戦地接近ナルヲ以テ五月同地ヲ発シ、領地同国岩瀬郡鋒槻村ニ寓居、六月鋒槻村ヲ発シ、同国伊達郡保原村ニ寓ス、七月保原村ヲ発シ、同国宮城郡仙台ニ到リ伊達氏家臣古内某ノ邸ニ寓居、仙台ヲ発シ、再ヒ伊達郡保原村ニ寓ス、十一月保原村出發、東京ニ帰ル、十二月血統者相選加盟相統相願候様御達有之、則チ私名前ヲ以テ上申ノ処、同月十五日家名相統被仰付磐城国白川郡棚倉ニ於テ更ニ六万石ヲ下賜ルとある。戊辰戦争の戦乱を避けて、領地の鋒衝村から他領の仙台まで転々としていたことが、この史料よりわかる。この時まで正功は幼かったが、戊辰戦争および明治維新はその後の正功の生き方に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

旅の後半は、郡山から二本松、福島、飯坂温泉まで足を伸ばし、そこでは堀切氏（慶応三年（一八六七）棚倉藩分領保原陣屋の支配下におかれた信夫郡上飯坂村庄屋）の接待を受けている。養蚕が盛んな地で、それに詳しい者に話を聞いている。また温泉につかり、温度を測ることもしている。その後、一九日に以前は金山があったという天栄山に地元の案内を雇って登り、湯本村温泉場に行き、温泉のスケッチなども残している^⑩。次に南会津方面へも訪れ、「塔のへつり」（現国指定天然記念物）という奇岩が並ぶ景勝地を見学し、なぜそのような景観ができたのかを分析し、洪水によると推定している。それから松平定信も好んで入ったという有名な甲子温泉に五日間滞在している。

帰路は、練貫村で奥州街道に戻り、生井河岸（栃木県）から川蒸気船永鳴丸に乗って一路本所高橋まで戻っている。先に東京に帰っていた家扶の恒屋が人力車で出迎え、霞町の本宅に帰宅した。二十五日間、距離にして里程百九十七里三十五町四十六間（約七九〇キロ）の旅であった。

おわりに

以上、阿部正功著「棚倉紀行」を紹介した。それが単に、行程やその日にあったことを記した旅日記風なものにとどまらず、通過した村々の地

質や植生、産物、また温泉の湯の流出量や計った温度など、様々なことが詳細に記録された内容豊かなものであることがわかった。まさに正功の旺盛な好奇心、鋭い観察眼が如実にあらわれた記録となっている。のちに人類学や土俗学を学ぶようになってから記された記録と根本は通じるものがあり、この頃には既にこの方面への学問的関心が芽生えていたことが窺える。

さらにこの史料は、いわば棚倉・福島、ひいては明治時代の民俗学や考古学を考える上で重要であるといえよう。また、華族と旧藩士や地域の人々との関係についても考察できうる貴重な史料でもあると思われる。

前稿でも指摘したように、阿部正功の事跡についてはまだまだ未解明な部分が多い。今後も正功が残した多くの記録を丹念に読み込み、その事跡についてさらに明らかにすることを課題として、この小稿を終えることとする。

最後になりましたが、史料所蔵者の阿部正靖氏をはじめ、白河集古苑、福島県文化財センター白河館の方々に大変お世話になりました。記して謝意を表します。

註

(1) 丸山美季「阿部正功の生涯と学問―人類学・土俗学・考古学」(『学習院大学史料館紀要』第一九号、二〇一一年)

(2) 高山優氏は、近世から維新後もしばらく阿部家の屋敷が麻布霞町にあったつながりから、正功が麻布周辺の歴史調査や自邸内での発掘を行っていたことなどに着目し、港区史研究への寄与という視点から、郷土史研究の先駆者として描いている(阿部正功の麻布学―華族による郷土史研究の一例―(一)) (『港区立港郷土資料館紀要』一四号所収、二〇一二年)、平成二四年度 ふくしま里帰り展図録 ふくしま考古学研究の春暁―棚倉式土器の発見・新地貝塚の発掘―(編集福島県文化財センター白河館、平成二四年)。

(3) 阿部正功に関する史料は、阿部正靖寄託・学習院大学史料館収蔵「陸

奥国棚倉藩主・華族阿部家史料」(陸奥国棚倉藩主・華族阿部家資料目録「二〇〇一年」)に含まれている。

阿部家は、譜代大名で、老中など幕府の要職を務めた人物を輩出した家柄である。第二代藩主阿部忠秋の時に武蔵国忍(現埼玉県行田市)を与えられ、三代正武の代に一〇万石を領するようになった。以来一八四年間忍を治めたが、文政六年(一八二二)に陸奥国白河(現福島県白河市)へ転封され、その後棚倉(現福島県棚倉町)に移され、その地で維新を迎えた。維新後、第一八代藩主正功は子爵を授けられ、華族に列せられた。本史料は昭和四三年(一九六八)に学習院大学に寄託され、総数四七〇〇余点にのぼる。以下、本稿で、阿部家史料を引用する際は、「阿部史料番号」とする。

(4) ふくしま県文化財センター白河館開催ふくしま里帰り展「ふくしま考古学の春暁―棚倉式土器の発見・新地貝塚の発掘―」(会期・平成二四年一〇月六日～二月二日)阿部一三二七―

(5) 註(一) 論文および白河集古苑所蔵阿部家資料八八参照。阿部一三二七―

(6) 阿部五七五

(7) 明治二年「書目(洋書・和漢書)」(阿部一二八〇)によれば、ギーキー著「地質学」(ロンドン出版、一八七六年)、ダナー「テキストブックデラロチー」(一八六三年、ニューヨーク)、フーケル「地質学」(一八七七年)などを読んでいたことがわかる。

(8) 白河集古苑所蔵阿部家資料八三

(9) 阿部一三二六―「目ノ湯百度・岩瀬郡二股野温泉瀧ノ湯(スケッチ)」、一三二六―「岩瀬郡湯本村温泉流出図・近辺ノ温泉百三十度・岩瀬郡湯本村ノ内二股野温泉(スケッチ)」

表1 明治13年棚倉紀行行程

月日	行程および滞在地	正功の主な動向
7月5日	霞町(東京)→千住→越谷(埼玉)→粕壁→幸手	
7月6日	幸手→栗橋利根川渡船(茨城)→中田駅→古河駅(栃木)→野木駅→間々田駅→小山駅→羽川→小金井→下石橋村→河内郡雀宮駅着、泊	
7月7日	雀宮→宇都宮駅→大沢駅→鬼怒川渡船(栃木)→上阿久津→氏家→喜連川→佐久山→大田原→市野沢→鍋掛駅→那珂川を渡り→那須郡堀越駅着、泊	森氏電信で棚倉出張の由を吉田氏まで伝える
7月8日	那須郡堀越駅→芦野駅→寄居村→白坂駅(福島)→小丸山→白河→白河本町池屋泊	白坂駅で棚倉より出迎え、吉田・牧村・桜井に面会/白河住居旧藩士出迎え/酒宴
7月9日	常宣寺→桜町→新地山→釜子村→蕪内村→若栗新田村→堤村→上台村→棚倉新町	棚倉より出迎えの旧臣/上台村で松本平八所有の化石を見る
7月10日	馬場村→都々古分神社→北町板庫	早朝より旧藩士に面会
7月11日	棚倉滞在	蓮華寺で戊辰戦死者の法会/旧城内撃剣場で撃剣を見る/蓮花寺で送別の宴
7月12日	棚倉滞在	鈴木、山岡、秋元の諸氏が来て、化石、木炭、貝石持参/松本平八所有の化石片同村隅田沼次郎持参/棚倉小学校生徒の講義を聞く
7月13日	棚倉→釜子村→河原田村→関和久村→北平山村→烏峠→泉崎村→矢吹原→中畑新田村→陸羽街道→矢吹駅	若栗新田にて水晶類/族を拾う
7月14日	矢吹→久米来村・保土原・矢田野→鉾衝村→矢田野村・泉田村・稲村→須賀川→阿武隈川を渡り、江持村→日出山→郡山→桑野村	鉾衝村室田氏に会う
7月15日	桑野村→大槻村→桑野村→郡山→高倉村→高倉→本宮→二本松	
7月16日	二本松→松川村→福島→瀬ノ上駅→上飯坂村(飯坂温泉)、堀切邸	
7月17日	瀧の湯→上飯坂村→瀬上村→浅川→松川→油井→二本松→本宮	
7月18日	本宮→高倉村→郡山→須賀川→鏡田村→保土原→飯豊→白子村→上下松本村→下牧ノ内村	
7月19日	下牧之内村→上牧之内村→天栄山→羽鳥村→大平村→田良尾村→湯本村	天栄山登山
7月20日	湯本村	引湯温度を計る
7月21日	湯本村→枝松村→白岩村→塔のへつり→オソブキ峠→二岐温泉道→象根村→湯本村	
7月22日	湯本村→温泉場→湯本村	湯守に温泉発見年の二岐嶽質問
7月23日	湯本村→田良尾村→宇野中川→山道→白川布引山→五輪平→甲子温泉場	棚倉発足以来第一の山越え
7月24日	甲子温泉滞在	温泉流出量を量る/「ゴーカイ」20匹を捕え、アルコールのびん詰にいれる
7月25日	甲子温泉滞在	雨風滞在
7月26日	甲子温泉滞在	冷湯へ入浴
7月27日	甲子温泉場→折口村→小田倉村→黒川村→那須郡高久村(栃木)	
7月28日	高久村→練貫村→陸羽街道→市野沢村→大田原→佐久山→喜連川→宇都宮	
7月29日	宇都宮→石橋駅→小山→間々田→生井村河岸→川蒸気永嶋丸→河岸・古河・栗橋・境・保志花・野田・流山・松戸・市川など→東京本所高橋→麻布邸	

*阿部1317-1より作成

「棚倉紀行」関係図（福島県管内全図より作成）

